時事新報

明治篇 全32巻 総254冊 復刻完結

時事新報

福澤先生誕一五〇年記念出版

第30巻～(7)

明治四十四年

龍溪書舎

Complete Reprinting of Jiji Shinpō(Meiji Era)

For the past 36 years, we have been working on a complete reprint of the 31-year run of the Meiji era *Jiji Shinpō*, and we are proud to announce completion of the project.

Jiji Shinpō was a daily newspaper founded by Yukichi Fukuzawa in 1882 (Meiji 15). One year earlier, with the "Political Crisis of 1881" the government promised to establish a parliament in ten years. The Liberal Party and the Constitutional Reform Party were organized as major competing parties, and large newspapers such as the *Tokyo Nichinichi Shinbun* and the *Yūbin Hōchi* turned into official newspapers of political parties. In the midst of all these events, the first issue of *Jiji Shinpō* proclaimed its spirit of "independence and liberty," working “not for the sake of one side like other party newspapers," and with the aim of "respecting the independence of Japan and having the sole purpose of national rights in the lifetime." It did not hesitate to criticize the government vehemently at times.

On the other hand, the *Jiji Shinpō* did not limit itself to political discussions but reflected Fukuzawa's Civilization Theory by offering a wide range of information on economics, society, religion, customs, education, academics, and the improvement of the lives of citizens. In particular, editorials and articles related to "socially vulnerable people," such as on the theme of expanding the rights of working women, were noteworthy, raising issues that were ahead of the times.

The newspaper was also characterized by its diverse structure and could be said to be the prototype of today's popular newspapers. For example, inclusion of serialized *Go* (game), panel cartoons (satirical cartoons by Kitazawa Rakuten), and cooking recipes were groundbreaking innovations. It also focused on overseas affairs, and through an exclusive contract with Reuters, *Jiji Shinpō* was the first Japanese newspaper to publish important information from around the world.

This reprint is the complete set, with not a single page missed, using the Keio University Library copy of the Tokyo edition as the main source, but with the additional full cooperation of Meiji Bunko at the University of Tokyo and the National Diet Library. Where the original paper was damaged or broken, or with insect-damage or writing on it, which is common in collections of early Meiji era papers, we have painstakingly reconstructed the pages so that they can be read accurately.Restoration of the original newspaper form took a very long time and much effort, but we have finally completed the work.

We sincerely hope that you will find it useful.

September 2022, **Ryukei Shosha Publishing Co. Ltd.**

復刻版『時事新報（明治篇）』の刊行に寄せて

弊社は三六年前から、『時事新報』の明治期発行分（三一年間）の完全復刻に取り組んで参りましたが、このたび完結にいたりました。

ご承知のとおり、「時事新報」は一八八二（明治一五）年に福沢諭吉が創刊した日刊紙です。その前年には「明治一四年の政変」が起こり、政府は一〇年後の国会開設を約束し、政権獲得をめざして自由党や立憲改進党が組織され、「東京日日新聞」や「郵便報知」などの大新聞はこぞって政党の機関紙と化していきます。そうしたなかで『時事新報』は創刊号において、「他の党派新聞の如く一方のためにするものあらず」として「独立不羈」の精神を掲げ、ときには激しい政府批判も躊躇しませんでした。

その一方、『時事新報』は、政治論に終始することなく、福沢の「文明開化論」を反映して、経済、社会、宗教、習俗、教育、学術、さらに国民生活の向上にかかわる情報を実に幅広くとりあげています。なかでも、頻繁に掲載された働く女性の権利拡充をテーマとしたものなど「社会的弱者」に寄り添った社説や取材記事は、時代を先取りした問題提起を含み、特筆すべきものがあります。

現在の大衆紙の原型ともいうべきその多彩な紙面構成も特徴的でした。たとえば、新聞囲碁の連載、コマ漫画（北澤楽天の風刺漫画）、料理のレシピなどは画期的な試みでした。ロイター通信との独占契約を結び、世界の重要情報もいち早く掲載していました。

復刻版は、撮影原版として慶応義塾大学附属図書館の所蔵紙（東京版）をメインとして、東京大学明治文庫、国立国会図書館の全面協力を得て、一頁も欠けることなく、完全に揃ったものとして作成しました。とくに明治前期の所蔵紙に多かった原紙の痛みや破損、虫食い、書き込みなどは、決してそのままにせず、正確に読めるよう像嵌して頁をつくりあげました。そのため修復作業に厖大な時間を要しましたが、ようやく完成した次第です。

皆さまのご活用を心よりお願い申し上げます。

二〇二二年 九月

龍溪書舎

『時事新報』の価値 ❶

それは、権力に阿（おもね）らない言論の砦であった

時事新報

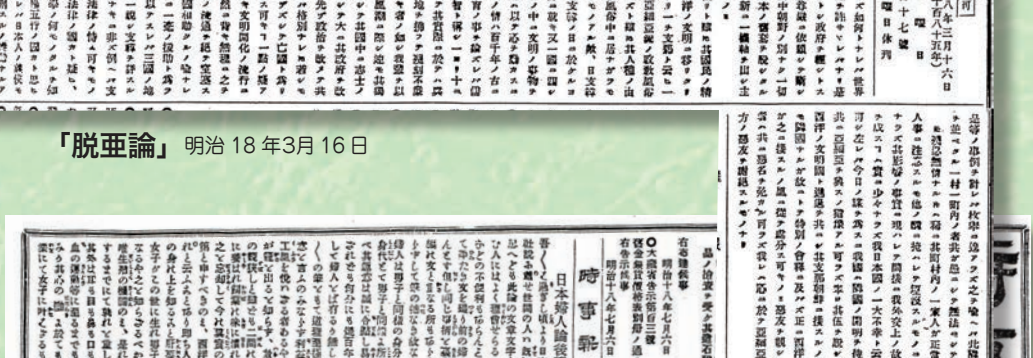
明治十八年三月十六日（西暦一千八百八十五年）

月曜日 第百十七號 日曜日休刊

脱亞論

時事新報

「脱亞論」明治 18 年3月16日



時事新報

明治十八年七月六日（西暦一千八百八十五年）

火曜日 第千十四號 日曜日休刊

日本婦人論後編 一

時事新報

「日本婦人論」明治 18 年 7 月7日

『時事新報』の価値 ❷

その主張は、自らも厳しく律した矜持の上にあった

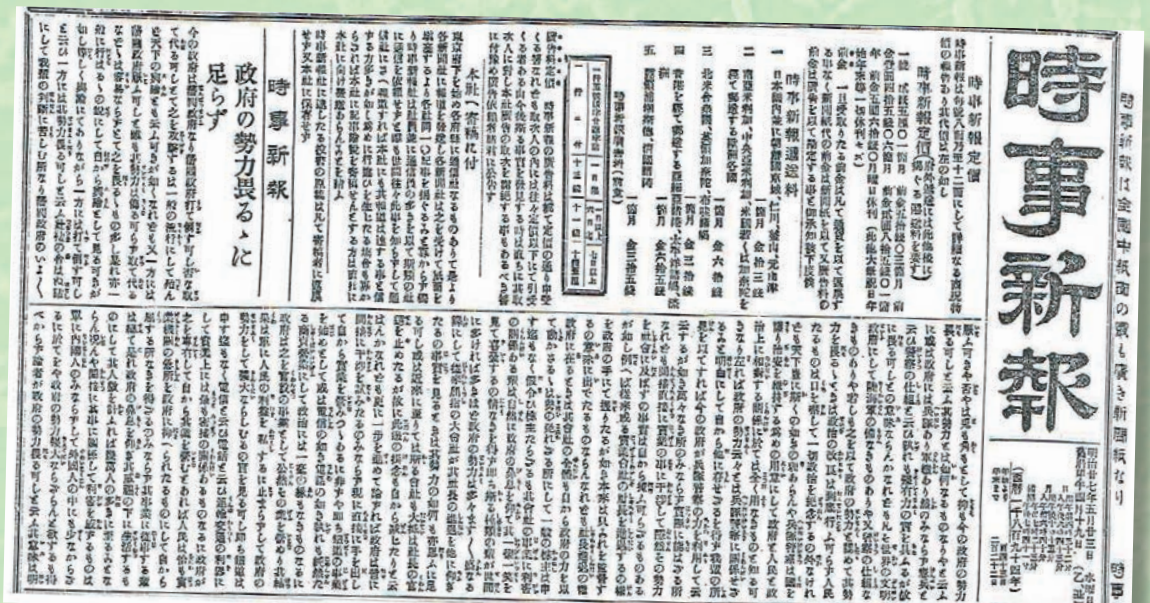
時事新報

新聞紙記事の手心を忘る可らず

新聞紙記事の手心を忘る可らず

明治 27 年 5 月 10 日

記者の品格について述べ、自らを戒める



時事新報

時事新報は全國中紙面の載も優き新聞紙なり

時事新報定價

時事新報は毎週人員月至十二回にして購讀なる諸見特價の報告あり其代價は左の如し

時事新報定價

時事新報遞送料

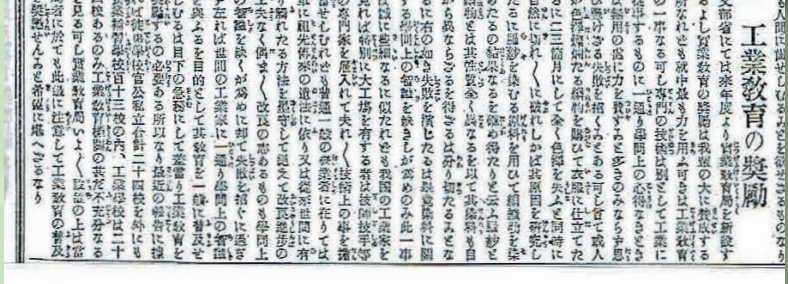
時事新報

政府の勢力畏るゝに足らず

「政府の勢力畏るゝに足らず」

明治 27 年 5 月 23 日

政府の過剰な干渉を批判した福澤諭吉の堂々たる主張



工業教育の奨励

「工業教育の奨励」

明治 33 年 1 月 28 日

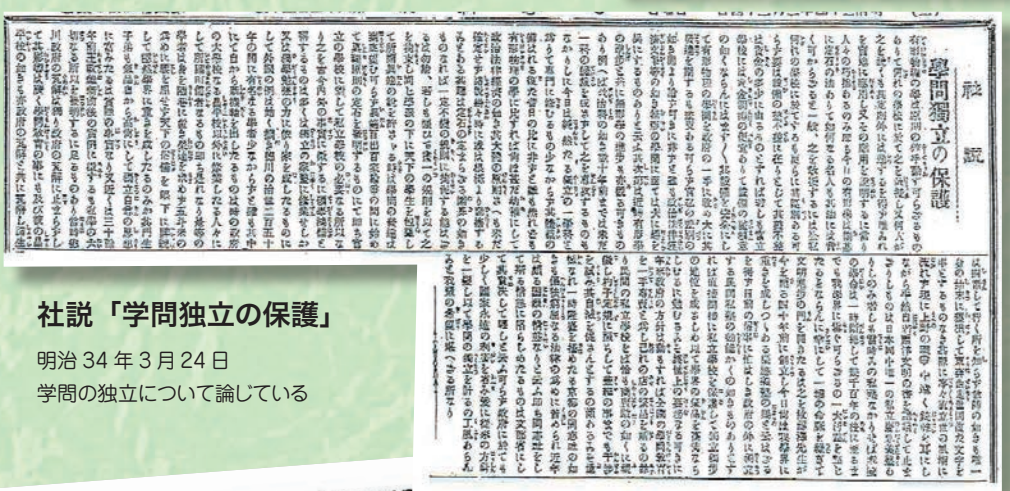
『時事新報』の価値 ❸

福澤の真骨頂ともいうべき社説

『時事新報』紙面見本

社説「日本の女子には身体生命の保証なし」

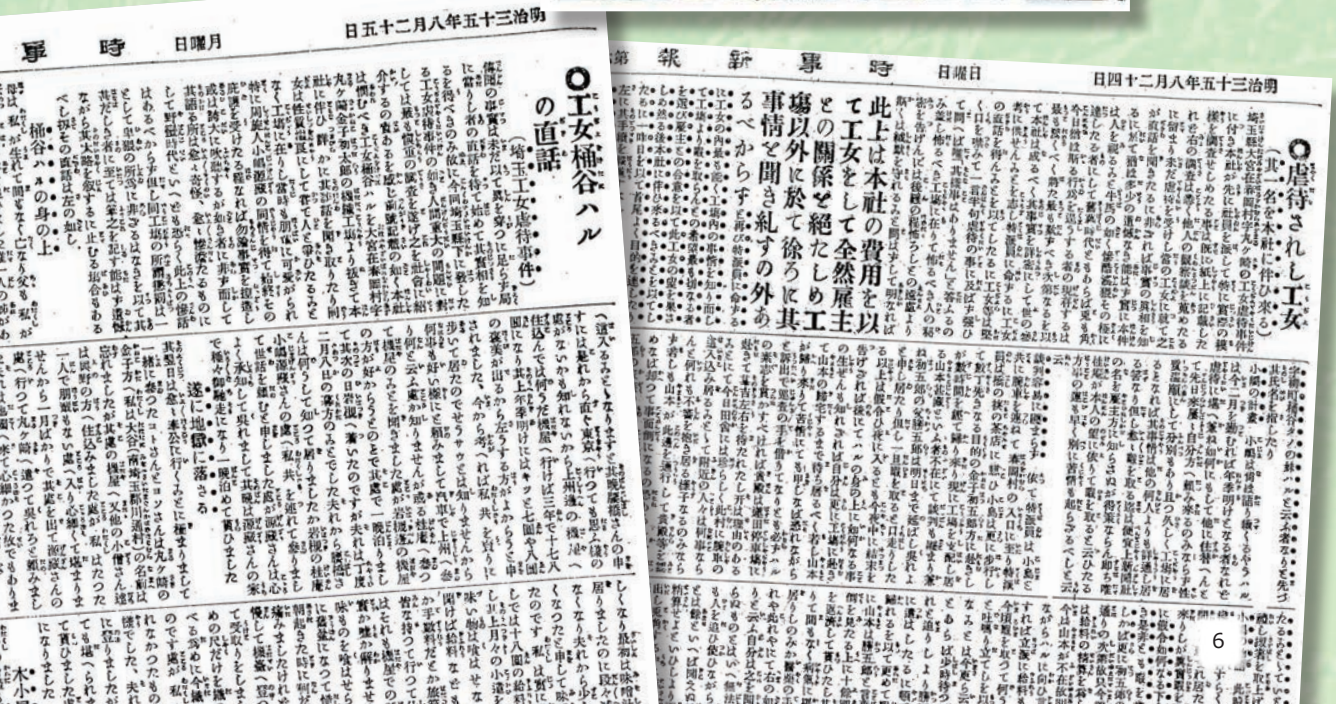
明治 33 年 1 月 28 日



社説「学問独立の保護」

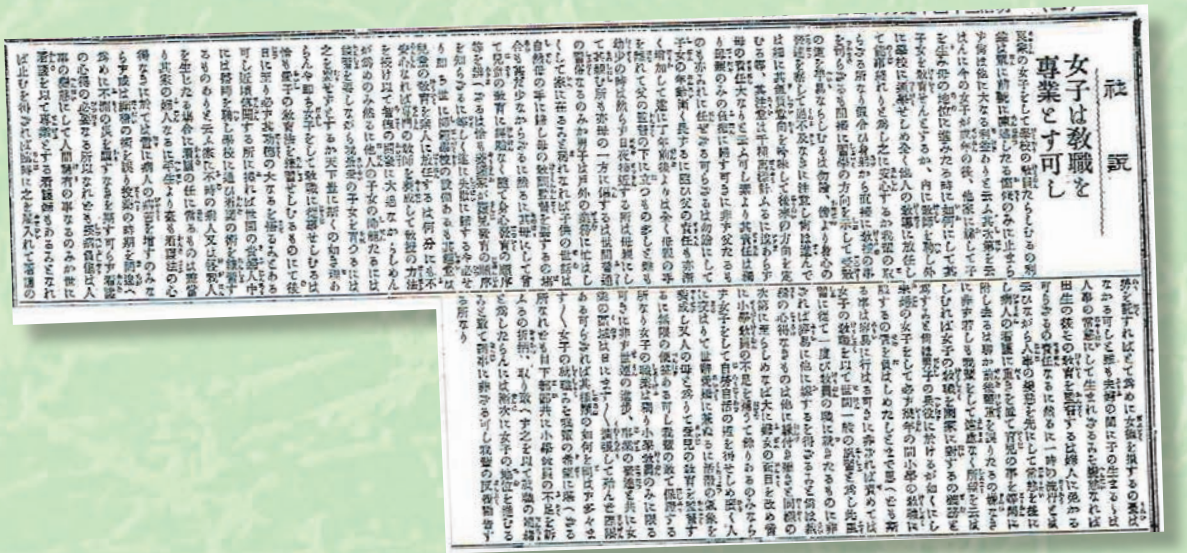
明治 34 年 3 月 24 日

学問の独立について論じている



『時事新報』の価値 ❹

女性や社会的弱者への眼差しは時代を先取り 真のジャーナリズムがここに



社説

女子は教職を専業とす可し

社説「女子は教職を専業とす可し」

明治 34 年 5 月 14 日

女子教員の必要性について述べている

「虐待されし工女」「工女桶谷ハルの直話」

明治 35 年 8 月 24 日、25 日、27 日

埼玉県の工場で働く女性が虐待され死亡した痛ましい事件について連載記事で追及し、世に問うた。

明治三十五年八月二十七日　水曜日　時事新報　第六千七百五十一號

○工女桶谷ハルの直話（前號の續き）

（埼玉工女虐待事件）

初度の逃走

虐待をせぬ約束

折檻しないと云ふ堅い約束が出來るなら歸さう

逃げて來たを申し訳に大屋根へ上り

逃げて來たを地獄で佛

落ちるとも見すく地獄へ

泣寢入り

再び逃出

虐待は止まず

新報　第六千七百四十九號

足を洗ふ樣な風をし

道樣が私を救つて下さるのだと思ひまして丁度九時頃でした仕事

織場へ高さ食物

『時事新報』推薦の言葉（以下50音順）❶

福沢とその時代を立体的に捉えるために

大阪大学名誉教授（経済政策思想）　猪木 武徳

輿論形成に大きな影響力のあった日刊新聞、『時事新報』（明治篇）の復刻が完結した。明治中期以後の日本の内政と社会風土、朝鮮・中国との外交関係だけでなく、福沢諭吉の思想に関心を持つ者にとっても必須の文献がより身近な存在となった。福沢の論考には時に矛盾するような言説が散見されると指摘されることがある。「門閥制度は親の仇で御座る」としつつも封建制に一定の評価を与え、教育の欠如は貧困をもたらすと指摘しつつ貧困が教育の機会を奪うとする、自由貿易はその利点を認めながら無原則に採用すべき通商政策ではないと論ずるのもそうした例であろう。『時事新報』を読むことによって、福沢がいかに理念と原則を重んじ、しかし物事の正負両面を見据えつつ状況に即した考えを述べていたかが理解できる。近代日本の傑出した言論人が、同時代の喫緊の課題をいかに立体的に、生き生きとリアルに論じたかが伝わる貴重な資料だ。

カリスマを喪ったあとで

慶應義塾大学法学部教授（日本政治思想史）　小川原 正道

福沢諭吉が興した慶應義塾、交詢社、そして時事新報は、いずれも、その偉大なカリスマ創業者を喪ったあと、大きな試練に直面した。福沢が一貫して求めたのが「独立」であり「自立」であったことを思うと、その事業は、福沢その人の亡き後、真の「独立」と「自立」を迫られたといってよい。

時事新報が、そうした試練にいかに直面し、それをどう克服しながら、明治の最後の十年を論じていったのか。今回完結した第二期の明治後期篇を手にとるとき、後世の我々は当時の記者や経営者たちの奮闘ぶりを読みとることができよう。日清戦争を支持しながら、戦後は排外主義と自尊自大を戒めた福沢の後を受けて、同紙は日露戦争にどう対していったのかなど、興味は尽きない。

明治期の復刻版刊行が完結されたことを喜び、これによって、ますます明治末期の時代思潮と福沢の「遺産」があきらかにされることを、期待してやまない。

海外の日本研究者による利用にも期待

東京大学大学院総合文化研究科教授
（アジア政治外交史・東アジア国際関係史）　川島 真

近代日本を代表するクオリティペーパーである『時事新報』の明治篇（復刻版）が完結した。これは、明治日本の言論を理解する上での重要な学術リソースが一つ整ったことを意味する。『時事新報』の名称は、「専ら近時の文明を記して、この文明に進む所以の方略事項を論じ、日新の風潮におくれずして、これを世上に報道せんとする」に由来するとされる。その精神は、政党など政治的な立場に基づく新聞が多い中で、「独立不羈」にあるとされた。

現在も、その『時事新報』に掲載された脱亜論が近代日本の対アジア侵略を支えた思想だというのが、中国はじめアジア諸国・地域の理解であり、昨今の日本での脱亜論理解との溝は大きい。『時事新報』明治篇が完結し、海外の日本研究者にも多く読まれることで、例えば当時の日本に、1880年代の日本清朝の強国化、朝鮮半島への進出に関する認識などが脱亜論に関連づけられて議論の俎上にのぜられていくことを期待したい。

言論人の初心がここにある

作家　北 康利

刊行開始から実に36年、戦前、五大紙の一角を占めた『時事新報』の明治篇（復刻版）完結は出版史に残る偉業であり、関係者のご尽力に心より敬意を表したい。

〝批判する際には対案をもってせよ〟という福澤諭吉先生の創業の志は、ただ単に『時事新報』のみならず、現代の言論人が常に拳々服膺するべきものであるはずだ。我が国が近代国家としての一歩を踏み出した際、先人は何を自らのプリンシプルとしたのか。この出版を機に、『時事新報』の精神に思いを致す人が一人でも多く出ることを願ってやまない。

時事新報の魅力

独立行政法人 国際協力機構（JICA）理事長
東京大学名誉教授（日本政治外交史）
北岡 伸一

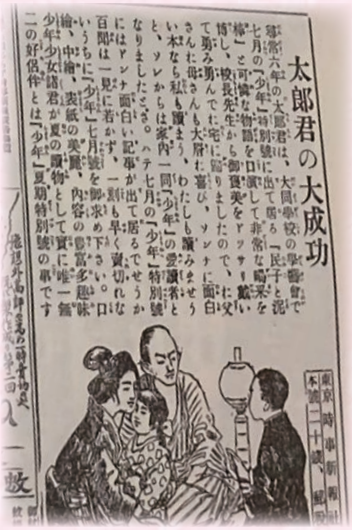
福沢諭吉が新聞の力を痛感したのは、文久2（1862）年の遣欧使節に参加して、上海で英字新聞を読み、南北戦争について知ったときだと思う。わずか二年前に訪れたアメリカで内戦が起こったことを知って、さぞ驚いたことだろう。新聞はまた、知的にも興味尽きないものだった。福沢が『西洋事情』において、「西人、新聞紙を見るを以て人間の一快楽事となし、これを読みて食を忘る」と述べているのは、彼自身のことでもあったに違いない。明治15年、福沢が『時事新報』を設立したのは、大隈重信の憲法構想が挫折した上でのことだった。それにもかかわらず、福沢は新聞人としての天性の才能を発揮し、政論を党派的に主張する大新聞でもなく、興味本位の小新聞でもない、公正中立な『時事新報』を作り上げた。イギリスの The Times と同じく、値段も格式も高く、他から一目置かれる新聞であった。明治中後期の最高の史料の一つである。

貴重な史料のデジタル化

元帝京大学文学部教授／元九州産業大学国際文化学部教授
（日本近現代史・国際関係論）
クリストファー・W・A・スピルマン

明治15年に福澤諭吉によって興された『時事新報』は、日本近代史の研究に必要不可欠な史料である。福澤の思想と行動を研究する歴史家はもちろんのこと、幅広く明治期の研究に携わる歴史家や文学研究者にとって貴重な史料であり、教材としても役に立つ。

龍溪書舎による復刻版『時事新報（明治篇）』の完結を歓迎し推薦いたします。



大正期・昭和期の復刻も望む

京都大学大学院教育学研究科教授（メディア史）
佐藤 卓己

復刻版『時事新報（明治篇）』完結は、メディア史研究にとっても一つの画期である。

メディア史研究者にとって、一次史料としては重要なのは未公刊の手紙・日記よりも紙面掲載の記事そのものである。それゆえ、『時事新報』明治期編の復刻が明治メディア史研究の発展に果たした役割は大きい。逆に言えば、大正期以降の新聞研究がいま一つ精彩を欠く理由の一つに、『時事新報』復刻版の不在を挙げることもできるだろう。現存する全国紙（朝日・毎日・讀賣）のデータベースだけを使ったお手軽な研究が量産されているからである。現在、私は『大阪時事新報』（明治38年『時事新報』の「分身同体」として創刊）で顧問（昭和9～10年）をつとめた「メディア出身議員」池崎忠孝の評伝を書いている。大正期の池崎は、文芸評論家・赤木桁平として『時事新報』に頻繁に登場している。『時事新報』の大正期編、昭和期編も刊行されることを待ち望んでいる。

近代化と国際化を根源的に問い直す必須史料

東京大学名誉教授（教育学）
佐藤 学

復刻版『時事新報（明治篇）』は、日本の近代化と国際化を根源的に問い直す必携の史料です。

この30年間の日本の経済、産業、学術、教育の凋落は著しいものがあります。その根底にあるのは、自国しか見ない「内向き思考」であり、自国中心の「国際感覚の欠如」だと思います。この内なる呪縛によって、日本は政治においても経済においても産業においても学術と教育においてもイノベーションを怠り、凋落の一途をたどっています。

いったい、この思考様式はどこから生まれたのか。どこにこの呪縛から脱出する糸口があるのか。それらの問いの解決の糸口を、本史料集は豊富に提供しています。

連欧連亜への道を逆照射する

筑波大学名誉教授（国際政治学）
／国際アジア共同体学会会長
進藤 榮一

脱亜入欧論の原点がここにある。ポストコロナ禍とウクライナ戦争後の日本の道を逆照射して、脱亜入欧を連亜連欧に反転させる転換の手がかりのすべてがここにある。

根本資料として全国の図書館に常備されることを祈念して。

『時事新報』推薦の言葉（以下50音順）❷

日本独自の外交評論の源流

大東文化大学法学部教授（日本政治外交史）
武田 知己

1882年に発刊された『時事新報』を高く評価している団体の一つに大正時代の外務省があった。「報道ノ詳細ナル点ト記事ノ確実ナル点」が『時事新報』の特徴であることは夙に知られていたが、特に『時事新報』は「外交及財政論」に秀でており、「知識階級、政治家、実業家方面」に固定的な読者が多かったのである（外務省情報部「大正十年七月廿日　東京大阪新聞社之現状」『華盛頓会議一件』所収）。

本復刻に見られる明治期の外交論を紐解いても、日本の国際的立場と力量を透徹した眼で見極めようとする独自の論考が少なくない。それは福澤諭吉から、大正・昭和の伊藤正徳や武藤山治らのリアリズムに支えられた軍事論、実業論へと継承され、戦後日本の海洋国家論・経済外交論の源流の一つともなっているように思われる。

刊行開始から36年をかけて、『時事新報（明治編）』復刻版が完結した。日本外交史の一学徒として、心からの拍手を送りたい。

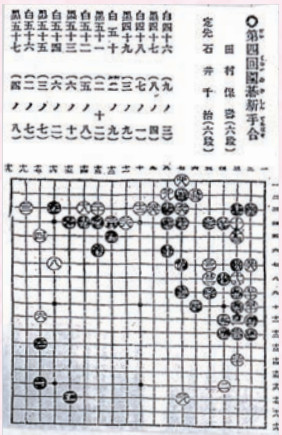
福澤と明治政府の距離を測定するための一級の史料

国際日本文化研究センター教授（日本憲法史）
瀧井 一博

明治十五年に発刊された『時事新報』は、明治十四年の政変の副産物と言える。

福沢諭吉は伊藤博文や井上馨と政府系新聞を興す計画を立てていたが、明治十四年十月に勃発した政変によって、大隈重信とともに福沢系の人士も政府から追われた。政府系新聞の企画も潰えたが、福沢は民間で『時事新報』を刊行して、たちまち有力紙の地位を確立した。そのような経緯に鑑みれば、ここには福沢一流の在野精神と官への抵抗姿勢がみなぎっていると容易に想像できる。

しかし、ことはそのように単純ではない。例えば、福沢に煮え湯を飲ませた伊藤が、明治十五年三月十四日に憲法調査のためにヨーロッパへ向けて出発した際、『時事新報』はその成果に期待する花向けの言葉を伝えている。この度復刻された『時事新報（明治篇）』は、福沢と明治政府の遠さばかりでなく、両者の近さも測定できる格好の史料である。



この文化的事業を祝って

東京大学・立教大学・桜美林大学名誉教授（大学史）
寺崎 昌男

『時事新報』紙が、現在確認できる最善の形で復刻される。文化史研究への力強い支援である。『時事新報』は、明治15（1882）年に中上川彦次郎の慶應義塾出版社が発刊し、独立不羈を旨とした福沢諭吉を事実上の主催者として維持した新しいメディアであった。

私が同紙に初めて触れたのは20代の末、学位論文の執筆時である。大学の自治・自立の成立過程をテーマに、大学法制の整備、学内における自治的慣行の形成、政界・社会における大学への世論、この三者の動態の推移を血眼になって追っていた。そのとき大学への世論を見るのに、この新聞からどれほど助けられたことだろう。

党派色や人脈的偏りが激しく四分五裂していた明治期の新聞雑誌群のことだから、大学論も錯綜を極めていた。しかし『時事新報』の立ち位置は公正かつ知的で、「独立不羈」を掲げるオピニオンリーダー誌として、安心してフォローすることが出来た。

日露戦争後あたりから経営的には苦衷をなめたようだが、明治から大正前半期を代表する日刊紙だったことに変わりはなかった。

近代日本の文化史研究の深化を祈りつつ、復刻をお祝いしたい。

歴史教育にとっても朗報

日本女子大学名誉教授（日本近現代史）**成田 龍一**

『時事新報』明治篇（復刻版）が完結したとの報は、実に悦ばしいことである。歴史学研究においてはむろんのこと、歴史教育にとっても朗報だ。高校では、2020年4月から、あらたに「歴史総合」という科目がはじまる。この科目は「主体的・対話的で、深い学び」を目指し、世界史と日本史を総合するとともに、歴史の深い理解のために、生徒と資料を共有しての授業が求められている。

こうした科目にとって、福沢諭吉と切っても切り離せない『時事新報』は、うってつけの材料である。福沢が熱を入れていた条約改正を学習するとき、どのような世界や東アジア情勢認識のもとで、議論がなされていたかを如実に知りうる。ひとつの引き金となったノルマントン号事件（1886年10月）では、連日の報道とともに、「社説」で船長の行動を疑問視し、義捐金募集も実施した。歴史教育の場においても、『時事新報』の活用は大きな力を発揮するであろう。

『時事新報』（明治篇）復刻版推薦の辞

読売新聞特別編集委員　**橋本 五郎**

新聞記者になって52年、常に胸に刻みつけてきた言葉があります。「新聞紙の外交論」と題した明治30（1897）年8月8日の『時事新報』社説です。

「外交の事を記し又これを論ずるに當りては自から外務大臣たるの心得を以てするが故に、一身の私に於ては世間の人気に投ず可き壮快の説なきに非ざれども、紙に臨めば自から筆の不自由を感じて自から躊躇するものなり。苟も国家の利害を思ふものならんには此心得なかる可らず。此心得あるものにして始めて共に今の外交を談ず可きのみ」。

ジャーナリストとして、永遠の真理だと思っています。真の「不偏不党の説」（『福翁自傳』）を展開するために起こした『時事新報』は、福澤畢生の大事業です。それをたどっていくことは、状況に応じて多彩に変化する福澤の「状況的思考」を考えるうえでも、近代日本の「産みの苦しみ」に思いを馳せるうえでも、必須の文献になるに違いありません。

「弱者」への眼差し—女性論の先駆性

国立公文書館アジア歴史資料センター長／筑波大学名誉教授（近代日本外交史）**波多野 澄雄**

『時事新報』は、大新聞がこぞって政党の機関紙と化すなかで、「独立不羈」の精神を掲げ、福沢の「文明開化論」を反映して、ときには厳しい政府批判も躊躇しませんでした。なかでも、女性の権利拡張や社会的弱者に寄り添った社説や取材記事は、時代を先取りした問題提起を含み特筆すべきものがあります。

たとえば、明治三〇年代には、埼玉県の工場で働く若い女工が虐待されて死亡するという痛ましい事件を連載記事で追いかけ、責任の所在追及や処遇改善のための提言にも及んでいます。さらに明治一〇年代から、多くの社説で女性問題をとりあげ、根強く残る伝統的な女性のあり方を批判しながら、「女権」や「婦権」の拡張や女性が働く場の開拓を熱心に訴えています。近代にふさわしい自立した女性像の確立は、「独立自尊」を支える重要な柱であったことが分かります。『時事新報』の完全復刻版の刊行を機に、福沢の先駆的な女性論が見直されることを期待します。

「屠蘇の御馳走」明治44年1月1日

『時事新報』推薦の言葉（以下50音順）❸

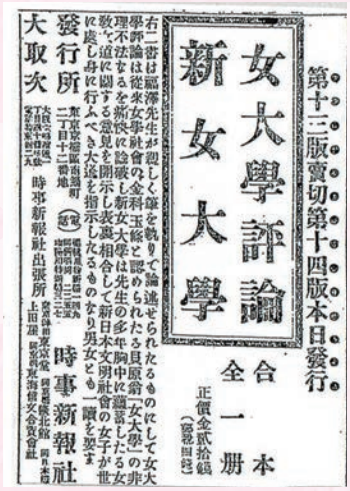
『時事新報』からアジアを読み解く

公益財団法人東洋文庫研究部長／
東京大学名誉教授（中国・東アジア近代史）
濱下 武志

『時事新報』に掲載されるアジア情報は、日本のアジア観・アジア政策を検討するうえで極めて重要な歴史資料である。それらの全体を系統的に読み込むことによって、明治期の日本のアジア像をめぐる多様な歴史的文脈が浮かび上がってくる。

一例として、1885年3月16日、福沢諭吉が『時事新報』誌上に掲載したとされる社説にある「脱亜」や「亜細亜」「西洋」の提示は、その後「脱亜論」「脱亜入欧」や「東洋」など多岐にわたるアジア論へと展開し、日本の対アジア政策を検討するうえでも転機となる論策であった。

今回の復刻版刊行により、改めてアジア論の長期の文脈を再考する機会を得て、『時事新報』が示すアジアが、現代の激動するアジアを考えるためにも不可欠な資料であることが確認されるだろう。


第十三版賣切第十四版本日發行
女大學評論
新女大學
合本 全一冊
正價金貳拾錢
（郵税四錢）
右二書は福澤先生が親しく筆を執りて論述せられたるものにして女大學評論は從來女學社會の金科玉條と認められたる貝原翁の非學説論は從來女學社會の金科玉條と認められたる貝原翁の非理不法なるを痛快に論破し新女大學は先生の多年胸中に蘊蓄したる女教の道に關する意見を開示し表裏相合して新日本文明社會の女子が世に處し身に行ふべき大道を指示したるものなり男女とも一讀を要す
發行所 東京麻布區市兵衛町二丁目十二番地 時事新報社
大取次 大阪今橋二丁目十四番地 時事新報北堀江分館 同九十番地 上田屋 同宮浦佐兵衛 同宮崎文祥堂 同宮崎文會堂

「社会のステイツマン」

東京大学名誉教授（日本政治思想史）
平石 直昭

かつて藤田省三は、政治のステイツマンである木戸孝允と対比して、福澤諭吉をこの言葉で呼んだ。

福澤は、普遍的価値（文明）に基づく新社会の建設をめざし、慶應義塾、交詢社、『時事新報』を創設した。新聞の発刊には、明治十四年の政変の影響が大きい。同年の『時事小言』で福澤は、政府内開明派むけの政策綱領を示していた。しかし政変でその実施が困難になると、輿論形成機関として独立新聞を創刊した。そして西洋は近時文明の衝撃渦中にあり、東洋は植民地化の危機にあるとの時代認識の下、内政外交・経済運輸・教育文化など、文明化に関わる諸課題をめぐり論陣を張っていったのである。

その論説は「社会のステイツマン」たる福澤が、現実と闘った方法を如実に示している。警世の雁奴、政事の診断医を自称した彼の真価は、時系列を追った本紙の分析により一層明らかになる。完成した復刻版は、新たな福澤像の造形に資するであろう。その意義は極めて大きい。

時代の本質を示す「復刻版」の目

ノンフィクション作家
保阪 正康

近代日本が出発するときに、日本の選択すべき国家像には4、5種のタイプがあったように思う。結果的に軍事主導の帝国主義的方向を選択したことになるのだが、このほかにも、帝国主義的であっても、より市民社会の方向、自由民権派の意向を汲む流れ、さらにイギリスのような議会主導政治とて想定され得た。アメリカのような連邦制もあり得た。

明治初期の日本社会の思想家、啓蒙家、そして言論人は実際によく勉強していて、かなり高度の理論を提示していた。特に福沢諭吉は『時事新報』を拠点にして多くの論点を示した。この新聞で12回に渡り連載し、その後書籍にまとめられた「帝室論」などは、現在の天皇制の重要な教科書たり得ている。この新聞は日々の事実を伝えつつ、縮刷版になってみれば時代の真実を伝えているとの感がしてくる。

『時事新報』の価値 ❺

新聞広告で識る明治文化史

全面広告
明治 44 年8月 22 日
クラブ化粧品シリーズの全面広告。美身クリーム、水白粉、粉白粉、美髪用ポマード、などの商品名と当時のパッケージデザインが確認できる貴重な史料。

その他の『時事新報』推薦者（50音順）

赤木 完爾　慶應義塾大学名誉教授
青木 保　元文化庁長官／国立新美術館館長／大阪大学名誉教授／政策研究大学院大学名誉教授
天児 慧　早稲田大学名誉教授
五百旗頭 薫　東京大学大学院法学政治学研究科教授
池井 優　慶應義塾大学名誉教授
伊藤 隆　東京大学名誉教授
伊藤 之雄　京都大学名誉教授
宇野 重規　東京大学社会科学研究所教授
大日方 純夫　早稲田大学名誉教授
笠原 十九司　都留文科大学名誉教授
加藤 聖文　人間文化研究機構国文学研究資料館准教授
加藤 祐三　横浜市立大学名誉教授
苅部 直　東京大学法学部教授
倉沢 愛子　慶應義塾大学名誉教授
黒沢 文貴　東京女子大学現代教養学部教授
河野 康子　法政大学名誉教授
後藤 乾一　早稲田大学名誉教授
桜井 邦朋　神奈川大学名誉教授
清水 元　元早稲田大学教授
杉山 伸也　慶應義塾大学名誉教授
高橋 和宏　法政大学法学部教授
戸部 良一　防衛大学校名誉教授
長谷川 雄一　東北福祉大学名誉教授
原 武史　明治学院大学名誉教授／放送大学教授
松沢 弘陽　北海道大学名誉教授
本宮 一男　横浜市立大学国際教養学部教授

以上二十六名

時事新報 明治前期篇 全20巻 総116冊

デジタル版のご案内

時事新報社刊／龍溪書舎編集部 編

協力：慶應義塾大学福澤研究センター、同図書館、国立国会図書館、東京大学法学部付属明治新聞雑誌文庫

明治 15 年 3 月～明治 34 年 2 月（福沢諭吉存命期間）

原本号数 第 1 号～第 6206 号（欠号なし、書込み・汚れ・切れなし、すべて東京版）

『時事新報』は、近代日本の偉大な啓蒙思想家福澤諭吉の創刊になる歴史的文化事業であり、不偏不党の立場を貫いた数少ない新聞である。

その清新重厚にして広い視野をもった内容が我が国の近代化に果たした役割は計り知れないほど大きなものであり、今日においてなお些かも色褪せることなく、識者の関心を寄せるところとなっている。日本近代史、マスコミ史、政治史全般の研究に不可欠な、まさに垂涎の資料である。

明治 15 年 3 月 1 日創刊号、
明治 22 年 2 月 11 日大日本帝国憲法発布 (2 面)、
明治 31 年 3 月 1 日 (2 面)

龍溪書舎

電子復刻 fukkoku.net 良書を絶版がない世界へ

「＝良書を絶版がない世界へ＝電子復刻」
イースト株式会社によるデジタル化が実現！
詳細は、 https://www.fukkoku.net/ryukei

時事新報　明治前篇　記事分類目録

時事新報の「記事分類目録」（B5 判、2 段組、約 4000 頁：予定）です。
2022 年 3 月より 2024 年 3 月まで、半年単位で電子図書館サーバを更新し追加します。

閲覧方法
記事分類目録はジャンルごとに順次提供します。
初回は「中国」、「朝鮮」、「運輸」です。
記事分類目録は、旧字を新字に修正、ジャンルごとに全文検索が可能。下の例では検索後、該当巻［第 17 巻（3）］を開くと 15 頁（電子版では 17 頁）にその項目がありません。

■記事分類目録　ジャンル例：国内（予定）
1天皇・皇族
2華族・士族
3政治　中央／政治一般（法令、制度等）／内閣・行政／国会（貴族院・衆議院）／選挙／政党・結社・集会・演説等／自由民権運動
4外交　外交一般、不平等条約、海外報告、鹿鳴館・居留地・在留外国人等
5軍事　軍事一般（思想、徴兵等）／陸軍／海軍
6警察
7社会　地方社会状況 ／裁判・監獄
8経済　経済一般（殖産興業、共進会、景況、統計・調査、経済団体等）／貿易金融：金融一般（大蔵省、財務行政、歳入・歳出、税制等）／金融市場／株式・債券／日本銀行／通貨・貨幣／銀行・信用組合／保険／証券運輸：陸運／馬車鉄道、鉄道、馬車・人力車他／海運（船舶、海難事故等）

■記事分類目録　ジャンル例：世界（予定）
1アジア
朝鮮　朝鮮一般／壬午軍乱／甲申政変／東学党の乱（甲午農民戦争）／閔妃暗殺事件／日清戦争、日清戦争後
中国　中国一般／清仏戦争（安南事件）／西欧諸国の利権要求／北清事変（義和団の乱）／香港／台湾
東アジア　東南アジア
オセアニア・南洋諸島
インド
西アジア　トルコ、イラン、イラク、アフガニスタン他
2ヨーロッパ
イギリス、フランス、ドイツ、スペイン、ポルトガル、イタリア他
3ロシア
4アメリカ
北米、中米、南米
5アフリカ
エジプト、南アフリカ他

中国
第 17 巻（3 明治 31（1898）年 3 月
北京特報　二月十二日
　償金支払延期の拒絶／内国債募集の議 50
支那の近状　254
南清叛乱の□あり　278
電報
清国外債談纏まる　北京三月一日 15
清国外債半額調約済　倫敦二月廿八日 同
清国外債の後報　北京三月一日 27
英国と清国独立　倫敦三月三日 51
英国と清国公債　同 同
英国は公文と要む　倫敦三月四日 63
清国露の本国に談ず　北京三月十日 127
露国の送兵益々多し　倫敦三月十日 同
公債談判にあらず政治上の譲与　倫敦三月十一日

電報
○清国外債談纏まる
○清国の外債條約は最後の調印相済みたり
○清国外債半額調約済

価格（記事分類目録+新聞 116 冊付き、同時 1 アクセス、税別）
540,000 円
2023 年 3 月末日までの特価。以降は 600,000 円

デジタル版　お問い合わせ先
■丸善雄松堂
丸善イーブックライブラリ　電話：03-6367-6008 ／メール：ebook-i@maruzen.co.jp
■紀伊国屋書店
KinoDen　電話：03-6910-0518 ／メール：ict_ebook@kinokuniya.co.jp

一次資料ですので、以下をご了解ください。
・目次、ノンブルも当時のままです。
・本文検索は行えません。
・版面の傾き、破れ切れ、判読できない文字の薄れやぼやけがある場合があります。
・見開き頁の中央部分が若干短くなり、文字や図版が見切れる箇所があります。

パンフレットデザイン：安福容子

縮刷版

時事新報 明治篇 構成一覧

時事新報社 刊／龍溪書舎編集部 編
協力　慶應義塾大学福澤研究センター、同図書館、国立国会図書館、東京大学法学部付属明治新聞雑誌文庫

第1期 明治前期篇 全 20 巻・総 116 冊

明治 15 年1月～明治 34 年2月（福沢諭吉存命期間）
原本号数　第 1 号～第 6206 号

揃 ISBN 978-4-8447-8865-2
A4 判・平均 400 頁

揃本体価　2,088,000 円

巻号	原本刊行年・月（明治）	原本号数	冊数	分冊本体価	ISBN
1～3	15.1～17.12	1～853	9	162,000 円	978-4-8447-8728-0
4～6	18.1～20.12	854～1789	9	162,000 円	978-4-8447-8729-7
7～9	21.1～23.12	1790～2885	12	216,000 円	978-4-8447-8730-3
10～11	24.1～25.12	2886～3540	12	216,000 円	978-4-8447-8731-0
12～13	26.1～27.12	3541～4166	12	216,000 円	978-4-8447-8732-7
14～15	28.1～29.12	4167～4791	12	216,000 円	978-4-8447-8733-4
16	30.1～30.12	4792～5104	12	216,000 円	978-4-8447-8734-1
17	31.1～31.12	5105～5417	12	216,000 円	978-4-8447-8735-8
18（上）	32.1～32.6	5418～5598	6	108,000 円	978-4-8447-8736-5
18（下）	32.7～32.12	5599～5782	6	108,000 円	978-4-8447-8737-2
19（上）	33.1～33.7	5783～5994	7	126,000 円	978-4-8447-8738-9
19（下）～20(2)	33.8～34.2	5995～6206	7	126,000 円	978-4-8447-8739-6

第 2 期 明治後期篇 全 12 巻・総 138 冊

明治 34 年 3 月～明治 45 年 7 月
原本号数　第 6207 号～第 10377 号

揃 ISBN 978-4-8447-4487-0
A4 判・平均 400 頁

揃本体価　3,870,000 円

巻号	原本刊行年・月（明治）	原本号数	冊数	分冊本体価	ISBN
20(3)～(12)	34.3～34.12	6207～6512	10	250,000 円	978-4-8447-7389-4
21(1)～(6)	35.1～35.6	6513～6693	6	150,000 円	978-4-8447-7390-0
21(7)～(12)	35.7～35.12	6694～6877	6	150,000 円	978-4-8447-7391-7
22(1)～(6)	36.1～36.6	6878～7058	6	150,000 円	978-4-8447-7392-4
22(7)～(12)	36.7～36.12	7059～7242	6	150,000 円	978-4-8447-7393-1
23(1)～(6)	37.1～37.6	7243～7424	6	150,000 円	978-4-8447-7394-8
23(7)～(12)	37.7～37.12	7425～7608	6	150,000 円	978-4-8447-7395-5
24(1)～(6)	38.1～38.6	7609～7789	6	150,000 円	978-4-8447-7396-2
24(7)～(12)	38.7～38.12	7790～7973	6	150,000 円	978-4-8447-7397-9
25(1)～(6)	39.1～39.6	7974～8154	6	180,000 円	978-4-8447-7398-6
25(7)～(12)	39.7～39.12	8155～8338	6	180,000 円	978-4-8447-7399-3
26(1)～(6)	40.1～40.6	8339～8519	7	210,000 円	978-4-8447-7400-6
26(7)～(12)	40.7～40.12	8520～8703	6	180,000 円	978-4-8447-7401-3
27(1)～(6)	41.1～41.6	8704～8885	6	180,000 円	978-4-8447-7402-0
27(7)～(12)	41.7～41.12	8886～9069	6	180,000 円	978-4-8447-7403-7
28(1)～(6)	42.1～42.6	9070～9250	6	180,000 円	978-4-8447-7404-4
28(7)～(12)	42.7～42.12	9251～9434	6	180,000 円	978-4-8447-7405-1
29(1)～(6)	43.1～43.6	9435～9615	6	180,000 円	978-4-8447-7406-8
29(7)～(12)	43.7～43.12	9616～9799	6	180,000 円	978-4-8447-7407-5
30(1)～(6)	44.1～44.6	9800～9980	6	180,000 円	978-4-8447-7408-2
30(7)～(12)	44.7～44.12	9981～10164	6	180,000 円	978-4-8447-7409-9
31(1)～(7)	45.1～45.7	10165～10377	7	230,000 円	978-4-8447-7410-5

龍溪書舎
〒179-0085 東京都練馬区早宮 2-2-17　http://www.ryuukei.co.jp
TEL 03(5920)5222　FAX 03(5920)5227　Mail : info@ryuukei.co.jp